

幕末明治初期の国産騎兵銃について

小西 雅徳

1. はじめに

今年の 3 月、東京都銃刀法審査会の海外輸入銃砲の鑑定に際し、気になる在銘国産滑空騎兵銃を手にすることができた。一般的に登録審査では時代判定を前提に全長・銃身長・口径に加え銃身等の記銘を確認するが、銃把（台株）に菊水紋の焼き印が見られ、しかも銃身下部に日本字銘が刻まれ国産であると判断できた。銃身裏にある釘彫りの細い製作者銘「小櫻忠正作」に加え、銃床数か所に墨書及び刻印による製造便号が記され大変興味深い内容を示していた。時間の関係で機関部を開けられず残念に思っていたところ、1 か月ほどしてオークションに件の鉄砲が出されていたので入札した。筆者はこの銃以外にも「松屋義路」銘の国産滑空騎兵銃を所持していたので、今回これらの銃の性格について紹介し会員からのご教示を頂きたいと考えた次第である。

銃砲史的に見れば騎兵銃はオランダ製ゲベール銃導入段階から幕末期における初期の洋式銃として知られる。天保年間が燧石式、安政年間からは管打ち式となり共にオランダ製であった。燧石式ゲベール銃は輸入数も少なくあまり流布することがなかったが、嘉永六年（1853）ペリー艦隊来航後は、軍制の洋式化に伴いオランダから多量のゲベール銃が輸入され、安政二年（1855）だけでも 6000 挺余に達した。並行して幕府は安政二年六月小銃製造を示令し、湯島馬場大筒鑄立場において西洋式小銃の製造を命じている。ここで製造された鉄砲は管打ち式前装滑空ゲベール銃であったが、製造工程上の諸種のトラブルのため、同五年（1858）暮れには前装施条銃製造に向けたオランダへの工作機械発注が行われている。湯島馬場及び関口での小銃製造の外、同三年二月国友鉄砲鍛冶でのゲベール銃の製造上納が行われ、諸藩及び全国鉄砲鍛冶でも数量不明ながら相当数のゲベール銃を含む各種銃砲を製造していた。

ところで一般的なゲベール銃の種類は長短二種類からなり歩兵銃と騎兵銃とからなる。国内で確認される歩兵ゲベール銃の多くは国産が多く、騎兵銃はそれに比べ少ないと見られている。但し、歩兵銃には国産を明示する製造名及び番号等の刻印が認められず騎兵銃も同様で、更に騎兵銃には他の銃には見られない所持銃落下防止用の吊環フレーム（側環）が付くが、すべてにそれがあつた訳ではない。吊環フレームの有無によって騎兵銃かそうでないかの区別が難しいが、騎兵銃の目安としての吊環の付属は重要であるものの、銃種上では長短により歩兵・騎兵及び砲兵銃とに区分するのが一般的である。筆者が紹介する 2 挺の鉄砲は長さ及び形状から騎兵銃に分類されるが、果たして機能として騎兵用かその外の用途に用いられたかとなると明確でない部分がある。

2. 騎兵銃 2 種について

2 挺の鉄砲の外観はほぼ同じである。違いがあるのは銃床肩部と機関部内部のパーツの大きさに多少の相違点がみられるものの、ほぼ同一形式及び基準で作られたと想定できる形状を示している。次にその特徴を紹介する。

1) 松屋義路銘騎兵銃

前装滑空管打ち式銃である。全長 1030mm、銃身長 567mm、口径 17mm、重量約 2800g を計測する。銃身鳶尾がやや外側に折れ曲がる点と機関部ハンマー螺子の欠損のほかは完品で

状態も良い。鉄製カルカ（棚杖）が付く。銃床肩部が横一段の掘り込みがある。銃身左側面に「三百三（花押） 松屋義路（花押）」、底面「十一」、銃身右側面火門下部「極」、鳶尾下面「改」のそれぞれの刻印があり、機関部内面にも「十一 三百三」の刻印・銃床内部先端底面に「三百三（花押）」、中央部分では墨書で上側から「上 正 十一」とある。さらに銃床鳶尾部分の掘り込みに×と刻み、この×印は胴締環にも認められる。多分、他の金属部品の個々に×印が刻まれているものと思われる。



写真1 松屋義路銘騎兵銃

2) 小櫻忠正銘騎兵銃

前装滑腔管打ち式銃。全長 1030mm、銃身長 633mm、口径 16.2mm、重量約 2850 g。欠損部分もなく比較的状态は良い。松屋義路銘騎兵銃では木部全体にニス塗装が施されるが、この銃ではあまり顕著でない経年劣化というか時代性を感じさせる。鉄製カルカ（棚杖）を付属する。銃身底面下部に「小櫻忠正作」と細字で刻み、鳶尾上部に「十二」の刻印。機関部内面にも「十二」を刻み、この漢数字は機関部ハンマー側面や引き金部、胴締環、螺子側板内側や

銃床底板内側にも同様に刻まれる。銃床内部底面に墨書で「二」「十二」を、同じく銃床鳶尾部分木部で「十二」と刻んでいる。小櫻銘騎兵銃では松屋銘騎兵銃以上に各パーツに「十二」を刻印している特徴がある。つまり 12 番目の鉄砲で同種の鉄砲が最低 12 挺製造されたことを意味する可能性がある。



写真 2 小櫻忠正銘騎兵銃

国内では長い歩兵ゲベール銃を多く見かけるものの騎兵銃は比較的少ない。典型的な資料としては国立歴史民俗博物館所蔵の前装管打ち式騎兵銃カラベイン銃 1 挺(所壮吉コレクション)が知られている。全長 1003mm、銃身長 60.3mm。口径 17.3mm で無銘。江戸末期から明治初期の日本製とされている。この銃は落下防止用の鉄製スリング吊環、つまり側環が左側面に付く典型的な騎兵銃であるが、ここで紹介した松屋・小櫻銃にはこの側面吊環がない。更に信州松代藩所持銃としてゲベール形式以外の銃からの形状機能を備えた騎兵銃 3 挺が伝来する。長野県の壬申番号を付すが、この 3 挺には「子六～八」までの漢数字が刻印されていることから国産銃の可能性が高く、銃身が短い上に銃身下にカルカ連結具を伴う構造である。一般的には制式騎兵銃にはこの側面吊環を付け場合が多いが、側環の有無が騎兵銃を規定する訳ではないが、アメリカ製の相当数の騎兵銃ではこの側環が付いてないのが多い。その相違点が時代性や機能面に起因するものなのかは判然としない。この点については後ほど触れたい。

3. 騎兵の制度運用と騎兵銃の導入について

騎兵銃は騎馬上での操作性を優先するため、歩兵銃に比べ銃身が短い特徴を持つ。射距離的には短所であるが、操作性において馬上での扱いを機能の面から追及していたものであり、銃の落下を防ぐ吊環が騎者のベルトと革紐(スリング)で連結するのが一般的であったが、1860年代には鞍の右側のサックを備え、そこに差し込む形式の銃がアメリカを中心に盛行する。騎兵には重騎兵と軽騎兵とがあるが、幕末に導入された騎兵は基本的には軽騎兵を想定した。

騎兵銃を用いた最初の騎兵は、天保十二年(1841)五月、武州徳丸原における高島秋帆によ

る三兵戦術の披露からである。この時は長崎地役人近藤雄蔵によるカラベイン銃（騎兵銃）とピストルとによる往返二回による射撃が行われた。

それからしばらく間を置いた安政年間ではオランダ式武器体系による兵制の導入が行われ、講武所においてその研究に着手したものの、騎兵を導入するまでに至らなかった。しかし、文久二年（1862）、幕府講武所における陸軍奉行らによる軍制改革（文久軍制改革）が、騎兵奉行において三兵戦術における騎兵制度を提言する動きを示すものの、従来の幕府における騎馬の運用上からくる制度上の枠から踏み出せず一旦頓挫した。慶應二年（1866）、幕府はフランス軍事顧問団にフランス式兵制による軍事改革（慶應軍制改革）をこころみ、騎兵隊4大隊2,000人規模を構想する。しかし現実には1個大隊300名程度の編成に留まり、それらを横浜でフランス軍により指導編成したが戊辰戦争段階になってもその騎兵組織を、実際に戦場へ投入し運用することがなかった。ほかにも幕府以外の諸藩において騎兵制度の試みは限定的で、例えあったとしても偵察程度にとどまった。文久から慶應期における騎兵を設ける際に、各種の騎兵銃が導入されるも、その多くは騎兵ではなく歩兵への貸与銃として機能したのが実態である。因みに安政年から明治十年（1877）頃までの騎兵銃の種類は50種以上に上ったが（表1）、それらの多くは当時の日本人の体格的な制約もあり騎兵用でなく陸地戦の歩兵銃として利用されたのが実態であった。つまり、日本における騎兵銃は騎兵用でなく歩兵用銃として機能したのである。

3. おわりに

表1にあるように欧米から多数の騎兵銃が輸入されて、慶應二年第2次長州征討や慶應四年戊辰戦争あるいは明治十年西南戦争に使用された。これら多くの騎兵銃は騎兵用というよりは、歩兵用として使われた。騎兵銃が騎兵に用いられなかった背景には騎兵組織が江戸時代において機能しなかったからで、日本最初の騎兵は明治三七年の日露戦争での秋山好古を嚆矢とする。

さて、ここで紹介した騎兵銃が果たして騎兵銃か否かとの課題を提示したい。表1には砲兵銃2種含む45種を提示した。安政期のオランダ製ゲベール銃からイタリア製70年式騎兵銃まで、他の国では例をみない多種類の騎兵銃が輸入され使用されている。騎兵銃の全長を見ると概ね1000mm以下が多く、アメリカ製スプリングフィールド銃、スノルト銃、ウインチェスター銃等を除くと900mm台である。つまり騎兵銃は全長900mmから1000mmに留まる傾向にあることがわかる。これと比較して先に紹介した2挺の騎兵銃はやや長い、砲兵銃よりは短い。一方で異式エンフィールド騎兵銃が1045mmであるから、一見それに近い特徴を見出すことも可能である。全体の形状や特に機関部構造からみて、オランダ及びイギリス製の騎兵銃と近い感じを印象として受け、さらに機関部の構造形状から見て慶應年間に輸入されたエンフィールド銃に近似した製造過程を窺えるがはっきりとはわからない。1860年代の管打ち式機関部構造は欧米とも類似しているから、その出自を見極めるのが難しい。特に今回の鉄砲のように日本製の鉄砲鍛冶製造であれば、鍛冶への技術伝来と時代背景を踏まえないと結論を導くことは危険である。しかしながら小櫻忠正銘騎兵銃の銃床（把）部分に菊水の焼き印が認められ、菊の紋章が使われるのが明治では四年以前であるから、その前の製造と年代観を押さえることができる。松屋義路銘騎兵銃もそれに近いと推測されるが、更に口径の大きさなど機能面で騎兵銃でなく散弾銃として明治以降に生産使用した側面も考えられる。そのためこれらの銃が幕末明治頃とされるのは、銃砲の製造面での研究が進んでいないためであり、類例の増加をまっとうして考究する必要性を強く感じている。

no	銃種	生産国	生産年	銃長 (mm)	口径 (mm)	銃重量 (g)	腔線数	備考
1	ゲベール騎兵銃	オランダ	19世紀	1040	17	3140	0	26.30g(弾丸重量)
2	ゲベール騎兵銃(甲)	日本	安政以降	920	16	2600	0	26.30g(弾丸重量)
3	ゲベール騎兵銃(乙)	日本	安政以降	980	15	2700	0	26.30g(弾丸重量)
4	ヤーゲル騎兵銃	オランダ	19世紀	810	15	3020	8	
5	エンフィールド騎兵銃(制式)	イギリス	1853年～	940	14.66	3110	5	33.6g(弾丸重量)
6	エンフィールド騎兵銃(異式)	イギリス	1853年～	1045	14.66	3050	5	33.6g(弾丸重量)
7	エンフィールド騎兵銃(改造)	日本	慶応明治	840	14.66	2800	5	33.6g(弾丸重量)
8	エンフィールド砲兵銃	イギリス	1853年～	1020	14.66	3270	5	33.6g(弾丸重量)
9	スプリングフィールド騎兵銃 (甲)	アメリカ	1860年～	1050	11.5	3200	3	
10	スプリングフィールド騎兵銃 (乙)	アメリカ	1860年～	1050	11.5	3500	3	
11	スプリングフィールド騎兵銃 (後装)	アメリカ	1860年～	940	14.5	3150	3	明治維新以降か
12	ツンナール騎兵銃	プロシア		860	14.5	2900	4	ドイツ
13	メイナード騎兵銃	アメリカ	1859年～	930	13	2800	6	ペーパープライマー 式?
14	スチューベン騎兵銃	オーストリア		990	11	3350	6	
15	シャープス騎兵銃(甲)	アメリカ	1859年～	990	13	3470	6	
16	シャープス騎兵銃(乙)	アメリカ		950	13	3150	6	
17	シャープス騎兵銃(雷管式)	アメリカ		970	13	3500	6	
18	スタール騎兵銃	アメリカ	1857年～	960	12.5	3400	5	
19	レミントン騎兵銃(甲)	アメリカ	1868年～	970	12.7	3450	6	明治4年天覧銃
20	レミントン騎兵銃(丙)	アメリカ	1868年～	890	12.7	2950	6	
21	レミントン騎兵銃(丁)	アメリカ	1868年～	870	12.7	3120	6	
22	スペンサー騎兵銃	アメリカ	1860年～	940	12.5	3860	6	明治5年武庫司175挺 所有
23	ピーボチイマルチニー騎兵銃	アメリカ	1862年～	980	12.5	3000	3	明治12年購入
24	スナイドル騎兵銃	イギリス	1866年～	960	14.5	2980	3	
25	ジョスリン騎兵銃	アメリカ	1860年～	980	14	3150	3	
26	グリー騎兵銃	アメリカ	1864年～	950	12.5	3500	4	
27	イリオン騎兵銃	不明	1860年～	980	14	3500	5	
28	アルビニー騎兵銃	ベルギー	1867年～	950	14.5	3100	5	イギリス製あり
29	ストーム騎兵銃(甲)	不明	1860年代	940	14.5	2400	3	
30	ストーム騎兵銃(乙)	不明	1860年代	940	14.5	2550	3	
31	スノルト騎兵銃(甲)	アメリカ	1860年代	1020	13.5	3300	6	
32	スノルト騎兵銃(乙)	アメリカ	1860年代	1020	13.5	3350	6	
33	コルト連発騎兵銃	アメリカ	1883年	940	11	2800	6	

34	レカルツ騎兵銃	イギリス	1860年～	910	11	2750	4	
35	ツンナール銃(短)	プロシア	1862年～	920	12.6	3000	4	ドイツ
36	ウインチェスター騎兵銃	アメリカ	1883年	1080	11	3980	6	
37	テリー砲兵銃(短)・騎兵銃	イギリス	1860年～	960	14	3000	5	
38	テリー砲兵銃(長)	イギリス	1860年～	1050	14	3550	5	
39	グリーン騎兵銃	アメリカ	1860年代	930	13.5	2750	5	
40	ウイルソン騎兵銃	アメリカ	1860年代	1000	14.66	3615	5	
41	ステーフル騎兵銃	イギリス	1860年代	1040	14.5	2620	5	
42	マンソー後装騎兵銃	フランス	1870年前後	1020	12	3710	6	掛川・小諸・小浜藩導入
43	グラー騎兵銃	フランス	1877年	1000	11	3650	4	フランス74年式
44	ドイツ71年式騎兵銃	ドイツ	1871年	1000	11	3300	4	
45	イタリア70年式騎兵銃	イタリア	1870年	930	10.4	3050	4	

表1 幕末明治輸入製造騎兵銃一覧